

パゴダ（仏塔）は寺院ではない

中小企業診断士 都築 治



シュエダゴン・パヤー、世界最大の仏塔

日本国内で刊行されている書物の中で、シュエダゴン・パゴダ寺院、スーレー・パゴダ寺院、もしくはチャウッタージー寺院などの表現を目にすることが多い。また、「シュエダゴン・パゴダは、ヤンゴンで一番大きい寺院である」と記した著名人のものさえも見られる。これらは、ミャンマーにおけるパゴダ（仏塔）と寺院の意義を、全く理解していない発想から、もしくは無知から来たものと考えられる。

ミャンマーでは仏塔（パゴダ）とお寺（寺院・僧院）は全く別の範疇のものである。ミャンマー人の宗教観や生活を理解する上で、この点を心して欲しいものである。

仏塔は在家の寄進によって成り立っており、在家信者がそのすべての運営を行っている。仏塔の境内には僧侶は居住していない。これに対して寺は、同じように在家の布施によっているが、運営は出家僧侶が行っておりそこで生活し修行を行っている。両者は宗教的施設という意外、全く関係のないものである。

パゴダはミャンマー語ではパヤー（PAYA）と言い、建物自体はゼディ（ZEDI・仏塔）と呼んでいる。パゴダは、端的に言えばお釈迦様の化身と考えるも良く、仏像、仏塔、聖遺物、経典などを総称しパゴダ（パヤー）として崇める。それ故、シュエダゴン・パヤーでは仏塔自体がお釈迦様の化身であるから仏塔を礼拝の対象とするが、マンダレーのマナムニ・パヤーでは塔に対してではなく、その中に安置されているマナムニの像を礼拝の対象とする。

ヤンゴンの寝釈迦像チャウッタージー・パヤーでは、横臥した釈迦像を同じくパゴダ（パヤー）と呼んで礼拝する。古都バガンのアーナンダ・パトーや、ダマヤンジー・パトーなどは塔に対しては拝まないが、中に安置してある過去仏の四体の像を拝む。これに対して、



マンダレーのマナムニ・パヤー

シュエジーゴン・パヤーでは塔自体がお釈迦さまの化身であるから、塔そのものを礼拝の対象とする。



アーナンダ・パトー



シュエジーゴン・パヤー

ミャンマー国内では、例外を除きお寺（寺院・僧院）には仏塔（ゼディ）はない。また仏塔の境内には僧侶は住まない。寺院・僧院は僧侶が居住して、宗教的行事や修行を行う施設である。

ミャンマー仏教の研究者で僧侶である生野善應師は、「ビルマ佛教寺院は、村落部では単独に存在し、都会では普通、土堀で囲まれる一つの境内に数寺院が集合して大規模な僧院を形成している場合が多い。」（「ビルマ佛教 その実態と修行」大蔵出版）と記し、通常、僧院の中に寺院（ポンジー・チャウン）があり、寺院は僧侶が修行し、寝食する場であるとしている。

日本の多くのミャンマー関係の書物では、「寺院とは本尊となる仏像が飾られ、中に入って参拝することができる宗教的施設である。」と定義し、アーナンダ・パトーやダマヤンジー・パトーを、それぞれアーナンダ寺院、ダマヤンジー寺院などと呼んでいる。そして、ミャンマーの宗教的施設をパゴダ、寺院、僧院の3区分にしている。



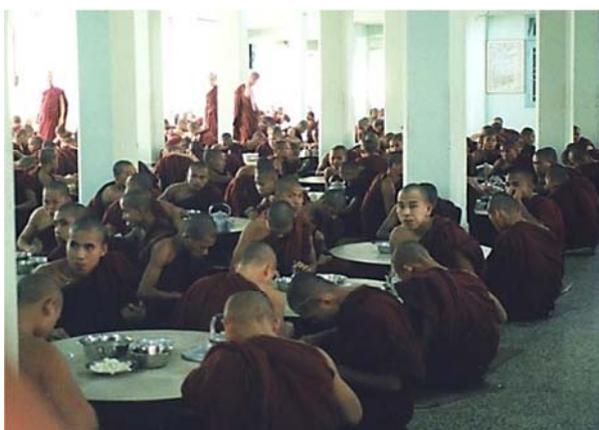
ダマヤンジー・パトー

原田正春・大野徹編著「ビルマ語辞典」では、パトー (PAHTO) を「レンガ造りのパゴダ」、また「内部に回廊をもつ寺院」と定義している。ミャンマー教育省発行の「ミャンマー語辞典」では、パトー (PAHTO) を「煉瓦造りの仏塔」と簡潔に定義し、同じく「緬英辞典」では「アーチ形の基部を持つ塔」とのみ定義している。パトーを寺院 (ポンジーチャウン) とは定義していない。

小学館発行の「国語大辞典」では、寺を「仏像を安置し、僧や尼が住んで、仏道の修行や仏事を行う建物。寺院。」とし、寺院を「寺とそれに付属した別舎の総称、また寺をいう。」としている。また僧院は、「寺で僧侶の住居である建物、また、広く寺院をいう。」と定義している。

パゴダ (仏塔) は、在家の信者が管理して運営を行っており、パゴダ祭り等の行事は、僧侶とは直接の関係なしに在家が執り行う。出家の僧侶はそれらについては一切関知しないし、ましてやそこで暮らし、僧侶主導の宗教的行事を行うことはない。一方お寺 (寺院・僧院) は、在家の布施によって成り立っているが、運営管理は出家の僧侶に委ねられている。僧侶はそこで生活し、宗教的行事及び修行を行っている。

パゴダ (仏塔) は在家信者の信仰の対象であり、寺院・僧院は出家 (ポンジー) 及び見習い僧 (コーイン) の修行の場である。そこには、宗教的建物以外の何らの関連性はない。全く異なるものである。



バゴーのチャッカワイン僧院



パコックのミョマアフレ僧院

